

旭川・おしゃべり交流会

過ごした人生語り、理解しあう



今回のテーマは「あの時代、人生語り合い」です。7月28日、帰国者の皆さんとボランティアの皆さんが、中国、ロシア、日本で同じ時代にどのような生活をしてきたか、お互いの人生経験を語り合いました。

中国帰国者Hさんは、1945年ハル濱の鉄道の駅の難民収容所で母が病死、食べ物もなく拾って食べたこと、そして養父母にもらわれたことなど、悲惨な体験を語りました。

樺太帰国者Kさんは、家族で残留し父は漁師をしたこと、ロシアの学校へ入ったけれどロシア語がわからなかったこと、韓国人の友達がいっぱいたことなど、残留後の生活を話しました。戦後生まれのLさんは、小さい頃は貧しく、いいことは何もなく、ロシアの子ども達と体操チームに入り、選手として活躍したことなど、サハリンの生活を語りました。

ボランティアのSさんは、戦争の時代をY県で過ごしたけれど静かであったことなどを語り、他の人も戦後の子ども時代の思い出を語りました。それぞれ国での体験から、中国やサハリンでの帰国者の苦難の人生が浮き彫りになりました。

ボランティアの皆さんからは、帰国者の人生をもっと知りたい、聞きたいと理解を深める一歩になりました。



稚内・日本の食文化を学ぶ会

料理を通じて文化体験



「日本の食文化を学ぶ会」が、10月20日稚内市の総谷勤労者会館調理室で行われました。樺太

帰国者の参加者は8名。講師の先生は、去年の料理講習会でもお料理を教えてくれた荒岡真貴子先生。「まるで炊き込みきのこごはん」「鮭の南蛮漬け」「真だくさん豚汁」の3品を調理しました。初めに先生から、料理の手順や切り方などを説明してもらい、二つのグループに分かれて実際に調理を行いました。

家で毎日料理はしていても、いざこのような料理教室となると、皆さん、ちょっと戸惑ってしまうようです。日本料理は、出汁に醤油や酒、みりん、砂糖、塩などを加えて味付けしますが、それぞれの調味料をきちんと計量して正しい順番で入れていくのは不慣れな様子でした。イチヨウ切りや短冊切りといった言葉もめずらしかったようです。

ほかにも「鮭の南蛮漬け」に添える野菜は生で食べるため、細く半切りにしなくてはなりませんが、豚汁に入れる野菜は大きめに切ります。Hさんはうっかり豚汁用のジャガイモも薄く切ってしまい、大笑いしていました。

最後に出来あがった料理を皆で試食しました。お料理はどれも好評で、皆さん「おいしい」「家でもつくってみる」と口々に言っていました。「こういうことはしょっちゅうやったら駄目。太ってしまうから。」なんて冗談を言う人もいました。戸惑いつつも、日本料理の細かなところに日本の食文化を体験した一日でした。



地域で温かな理解を

「中国・樺太帰国者を知る集い」

11月26日地域の人々に残留邦人への理解を深めてもらう啓発事業として「中国・樺太帰国者を知る集い」が、かでのホールで開催されます。

これまで毎年行われていた文化祭のように、太極拳や中国の伝統舞踊、日本語の学習発表もあります。第一部は「知って下さい残留邦人(帰国者)のこと」と題して、帰国者理解のための特別なプログラムを準備しています。

そのひとつが樺太帰国者による体験再現劇。帰国者の実際の体験をもとに、文化や習慣の違い、言葉の壁から生まれた戸惑いや誤解が描かれます。中国もロシアもそれぞれの文化や習慣があるけれど、自分でも気づかないまま誤解していることがあるかもしれない…。劇を見た方にそんなことを少しでも考えてもらえたら、と樺太帰国者1世クラスを中心にした有志が、今一生懸命練習中です。日本語で演じるため、人によっては自分のセリフをロシア文字で台本に書きこんだりと、奮闘しています。



※写真は去年の文化祭の様子です。

また札幌市立大通高校とNPO「CaSA」・ロシア学校の子どもたちが歌と踊りを披露してくれます。参加希望の方は、FAX・郵送・メールで当センターまでお申し込みください。入場無料です。お問い合わせも当センターまでお願いいたします。

NPO「CaSA」について

「子どもたちに選択の幅を」

「CaSA」は、「Child-assist Sapporo Association」の略で、外国人児童・保護者のサポートを主な目的として、2008年に設立された非営利団体です。北海道大学学術研究員のスヴェトラナ・パイチャゼ先生と1人の小学校教師によって設立されました。日本語教育とその他の科目の学習支援が、ボランティア講師によって行われています。

現在は、毎週土曜日に北海道大学構内で「土曜教室・ロシア学校」と並行して授業が行われており、ここに多くの樺太帰国者の子どもたちが通っています。

帰国者の子どもたちは、日本・ロシア・韓国など複数の文化と言語を背景に持っていますが、「何人として、どの言語で生きていくか」ということは、子どもたち一人ひとりが自分で決めること。ただ子どもたちの選択の幅をできるだけ広げてあげることが、とても大事」と、CaSA代表のパイチャゼ先生は言います。実際、帰国者の子どもたちのほとんどが「ロシア学校」でロシア語を、「CaSA」では日本語を学んでいるそうです。

パイチャゼ先生も、自身のお子さんを日本で育てています。「CaSA」設立の一番大きな動機は、自分が母親になったことだと言います。子どもたちには、「いま学んでいること、経験していることを大切にして、これからの人生に生かしてほしい」と語ってくれました。

もみじ台団地・介護予防サロン

この街で知り合いできてうれしい



毎月1回のもみじ台団地での介護予防サロン、7月から2年目に入りました。毎回、25名ほどの帰国者と町内の皆さんが参加しています。

指導する竹田憲司先生(北海学園大名誉教授)は、筋肉や関節の動きをやさしく説明、みなさん、身体の知識も深まり興味も湧きます。転倒防止や認知症予防に効果のあるラダー運動は、先生から「いいよ、いいよ」「すばらしい!」と声かけられながら、にぎやかに進みます。

1時間の運動が終わると1時間の交流会。ジャスマン茶とお菓子がふるまわれ、おしゃべりもはずみです。町内のAさんは「ここで顔見知りになったおかげで、道やスーパーであったときにも声をかけて立ち話もできる。帰国者の皆さんもこの街で知り合いができてうれしい、と言ってくれるのがうれしい」と笑顔で話してくれました。

前田公園団地の出前日本語教室が終了

10月から介護予防と交流の会に

4月に始まった前田公園団地の出前日本語教室は、半年の講座を9月に終了しました。10月からはNPOシーズネットに委託して、もみじ台団地で取り組まれてきた「介護予防サロン」が始まることになりました。



出前教室は、センターに通所できない帰国者の皆さんのために、やさしく日本語を学びながら楽しく交流しようと進められ、帰国者の皆さんには学ぶことが楽しい、集まる場所があってうれしいと喜ばれてきました。

引き続き、老後の生活をさまざまな経験を上げて豊かに楽しく過ごしてもらおうと、健康維持と交流の会に発展させることになりました。

担当するNPOシーズネットの青木さんは「新たな広がりができてうれしい」と今後の取り組みに張り切っています。

料理交流会

おはぎと漬けもので交流



日本人にとって身近で、比較的かんたんにつくれる料理を体験して

もらおうと、7月25日かでの調理室で料理交流会が開かれました。メニューは、「おはぎ」と「キャベツときゅうりの漬物」。市販の浅漬の素をつかった漬物は意外に好評で、空のパッケージを持ち帰った人もいました。おはぎは餡が目すぎるとい人もいましたが、終わってみれば、皆きれいに平らげていて、楽しく食文化交流できました。

11月・12月・1月の行事

11月20日	DVD上映会
11月22日	ボランティア研修会(旭川)
11月26日	中国・樺太帰国者を知る集い
12月23日	樺太帰国者交流会
12月23日~1月10日	日本語教室冬休み